

2022年度の インフルエンザ ワクチンと 流行予想について



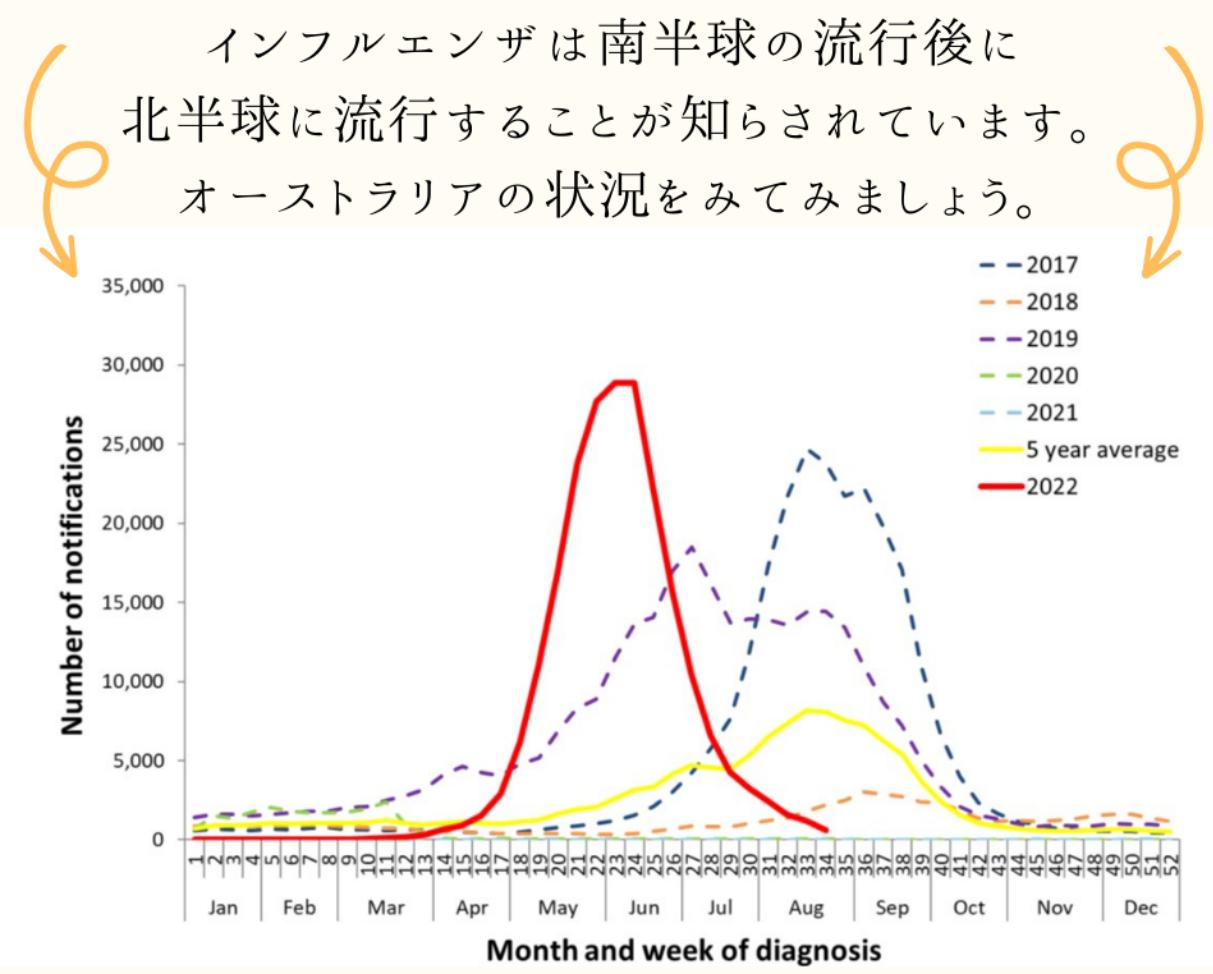
国内でコロナウィルスの流行が始まった
2020年2月以降、インフルエンザの
国内流行はほぼゼロに近い(コロナ流行前の
1/2000だそうです)状態が続いています。
一昨年も昨年も全く流行がありませんでした。
インフルエンザB型の一部の株については、
世界から消滅した可能性さえ指摘されています。
ただし、これだけインフルエンザが流行しないと
いうことは異常事態であり、社会全体の
インフルエンザに対する集団免疫が
弱くなっていると考えられます。



今シーズンの立ち上がりの急激さが
よく理解できます。
そして一昨年、昨年は全く流行が
なかったこともわかります。
オーストラリアのこの状況をみると、
入国が緩和されている日本で流行しない
理由がないように感じます。
ちなみに、オーストラリアの2022年の流行は
例年より明らかに早く始まったため、
未曾有の大流行になると懸念されました。

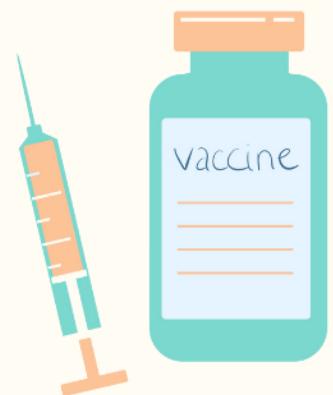


今シーズンはインフルエンザ流行の
可能性が高いと考えられます。



ところが、立ち上がりが早かつただけで
流行の規模としては例年と
さほど変わらなかったことがわかり、
その点は安心材料となります。
今シーズンオーストラリアで流行した
もののほとんどがA香港型であったため、
日本でもそのような傾向になると懸念されます。





インフルエンザワクチンは、流行が予測される株を選択して製造しています。

A型から2株、B型から2株、合わせて4株に対するワクチンとなります。

ワクチンの有効性は流行株とワクチン株の抗原性の一致度によって異なります。



ワクチンの効果は接種後2週間から約5か月続くとされています。

現在の不活化ワクチンは、インフルエンザウイルスの感染を防ぐ働きはありません。

発症を抑える効果がある程度認められている程度です。1歳未満の乳児では、統計学的に有意な効果を見出せなかったという報告もありますが、安全性が高いこと、次年度以降のワクチンがより効果が出やすいと考えられることを考えると接種しておいた方がいいと思います。



まとめると・・・

- ①2022年シーズンは日本でもインフルエンザが流行する
- ②例年より早く流行が始まり急激に広がるが最終的な患者数としては例年の流行期と変わらない
- ③A香港型が流行のメインになる
- ④B型はあまり流行しない
- ⑤ワクチン供給量は過去最多となる見通し（昨年比135%）で、例年よりは予約が取りやすい

と予想することができます。

あくまで予想ですのでその点はご了承ください。

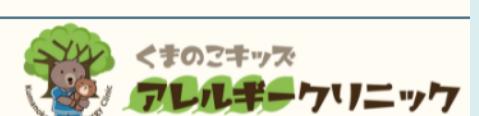


A型はH1N1株(ソ連型)とH3N2株(香港型)のどちらかが流行します。

ワクチンはH1N1株には高い有効性を期待できますが、H3N2株は変異しやすいため有効性を保つのは難しいとされています。

このため、H1N1株が流行した年にはワクチンの効果が出やすく、H3N2株が流行した年には効果が乏しくなると考えられています。

ただし、**今年度WHOは北半球用のワクチンでの使用株を南半球で流行したH3N2株(2a.2郡に属するA/Darwin/9/2021)に変更する対策を取っておりこれが功を奏すことが期待されています。**



学童におけるインフルエンザワクチンの集団接種は、個人における直接的な予防効果だけでなく、社会的な流行を阻止あるいは減少させ、高齢者の死亡率を大きく減少させることが確認されています。

このように、インフルエンザワクチンの有効性はさまざまな条件により毎年変動がみられ限界もあります。しかし、ワクチン株と流行株の抗原性が一致したときには効果が高いこと、ワクチンには重症化や死亡の予防にある程度効果があること、またより多くの方が接種することにより、接種できない方も守る「集団免疫効果」の観点からも、一人でも多くのお子さんが接種することが重要です。

